

# 鈴木式点字触読指導法

日本語点字の構成		点配列		①④ ②⑤ ③⑥		
基本	ア●○ ○●○ ○●○	イ●○ ●○ ○●○	ウ●● ○●○ ○●○	エ●● ●○ ○●○	オ○● ●○ ○●○	ワ○●○ ○●○ ●○
カ行	カ●○ ○●○ ○●○	キ●○ ●○ ○●○	ク●● ○●○ ○●○	ケ●● ●○ ○●○	コ○● ○●○ ○●○	ク○●○ ○●○ ○●○
サ行	サ●○ ○●○ ○●○	シ●○ ●○ ○●○	ス●● ○●○ ○●○	セ●● ●○ ○●○	ソ○● ○●○ ○●○	ン○●○ ○●○ ○●○
タ行	タ●○ ○●○ ○●○	チ●○ ●○ ○●○	ツ●● ○●○ ○●○	テ●● ●○ ○●○	ト○● ○●○ ○●○	句点、○●○ ●○ ●○
ナ行	ナ●○ ○●○ ○●○	ニ●○ ●○ ○●○	ヌ●● ○●○ ○●○	ネ●● ●○ ○●○	ノ○● ○●○ ○●○	読点、○●○ ●○ ○●○
ハ行	ハ●○ ○●○ ○●○	ヒ●○ ●○ ○●○	フ●● ○●○ ○●○	ヘ●● ●○ ○●○	ホ○● ○●○ ○●○	
マ行	マ●○ ○●○ ○●○	ミ●○ ●○ ○●○	ム●● ○●○ ○●○	メ●● ●○ ○●○	モ○● ○●○ ○●○	
ヤ行	ヤ○● ○●○ ○●○		ユ○● ○●○ ○●○		ヨ○● ○●○ ○●○	
ラ行	ラ●○ ○●○ ○●○	リ●○ ●○ ○●○	ル●● ○●○ ○●○	レ●● ●○ ○●○	ロ○● ○●○ ○●○	

鈴木<sup>①</sup>②③④⑤は、1972年以來、点字を常用することが必要な先天的あるいは早期失明の視覚障害児（以後、盲児とする。）や、中途失明児・者への点字触読指導を行ってきた。本稿では、その経緯と具体的な点字触読指導に係る指導内容・方法について述べたい。

現在、点字を常用する人たちが使用している6点点字は、1824年パリ盲学校に在籍していたルイ・ブライユがフランス語点字として考案したものである。

このフランス語点字は、石川倉次により、1890年、日本語点字として翻案された。

その構成は、母音「アイウエオ」を基盤として、例えばカ行であれば⑥点を付加し、サ行であれば⑤⑥点を付加するというローマ字の母音「a i u e o」にカ行であればkを付け、サ行であればsを付ける構造と類似している。

左が、日本語点字の構成一覧である。

## 1 鈴木式点字触読指導法の開発について

瀬尾政雄<sup>⑥</sup>は、1966年、東京教育大学付属盲学校小学部1年生4名の点字を常用する児童の点字清音46文字の習得状況を5月3回、6月3回、7月3回の触読調査をして、難易度別に3段階に整理した。その難易度別の結果は、次のとおりである。

第1段階（易）17文字	第2段階（普通）16文字	第3段階（難）13文字
お、い、あ、う、か、く、す、さ、た、ぬ、に、ひ、は、ふ、め、よ、れ	え、こ、そ、せ、ち、て、の、へ、も、ま、む、み、や、ゆ、ら、ろ	き、け、し、と、つ、ね、な、ほ、る、り、ん、わ、を

上表の中でも、「あ、め、れ、ふ、う、い、に」の7文字は、調査第1回目の5/17時点で3名以上の盲児が触読可能になっていた点字であり、筆者は小学部の早い時点で触読可能になった点字文字こそ、読みやすい点字と位置付けた。この筆者が読みやすいと位置付けた点字の形態は、非常に安定した分かりやすい形を持っていることに気がついた。

あ：点一つ	め：縦長長方形	れ：小さな塊	ふ：レール状、上と下に線
う：短い横の線	い：縦の短い線	に：縦の長い線	く：上に横線、右下に点

筆者は、この安定した形を持った7文字に、あえて三角の形をした「く」を、鈴木式点字触読指導法の第1段階として、位置づけて指導することとした。

### (1) 昭和47年～49年の工夫

昭和47年～49年までの4段階難易度別の点字配当は、次のとおりである。

1段階	1	あ	め	れ	ふ	う	い	に	く		
2段階	2	こ	た	か	は	ぬ	お	さ	よ	ひ	
3段階	3	そ	ち	せ	み	も	て	へ	む		
4段階		な	や	ゆ	ら	り	ろ	ん	え	る	
	4	す	ね	き	の	と	し	け	つ		
		ほ	ま	わ	を						

## (2) 昭和50年以降

昭和47年～49年までの3年間の点字触読指導の実践経過をもとに、次の5段階に難易度別点字群を組み替えて指導することとした。

第1段階	あ	め	れ	ふ	う	い	に	く			
第2段階	こ	か	お	よ	ひ	ぬ	の	と	な		
第3段階	た	さ	し	み	わ	む	ね	も	つ		
第4段階	ゆ	す	を	や	は	る	ま	そ	き		
第5段階	へ	け	ん	ほ	ら	せ	ち	り	ろ	え	て

## 2 鈴木式点字触読指導法の指導内容・方法

### (1) 点字触読指導は何歳から開始できるか

鈴木は、昭和46年から指導実践してきた点字触読指導の実践を整理等して北海道視覚障害教育研究会を中心に報告等してきた。しかし、各盲学校での点字指導を見てみると、全ての教師が受け持った全ての盲児に対して、専門性を発揮した点字指導を十分にしているとはいえない現実に向き合ってきた。例えば、ある盲学校の校長として職務した時、知的障害を併せ有する視覚障害児に対して点字触読指導をしていないので、何故、点字指導を行わないのかと担当の教員に聞いてみたところ、盲児の発達段階がまだ点字を指導する段階まで至っていないとの答であった。では、どのような指導を行ったら、その段階に到達するのであろうか。その指導内容・方法も持たないままに、安易な対応をしているところに、大きなその学校の課題を感じた。その経緯等について、筆者<sup>(13)</sup>は、2004年、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編「特別支援教育 No.15」巻頭言<sup>(7)</sup>として、点字触読指導が盲児の実態に応じて実施されていない現状とその対応について述べた。次は、点字指導に係る部分である。

※縦書を横書に変換

巻頭言 「専門性を育て磨き上げる」

北海道立特殊教育センター所長 鈴木重男

○専門性は消えるもの

.....

また、次に赴任した B 盲学校では、重複障害学級の授業で点字を使う盲児が少ないので「どうして子どもたちに点字を指導しないのですか」と先生方に聞いてみました。すると「この子たちは、重複障害児でまだ点字を学ばまでの発達段階には至っておりませんので、知的障害養護学校の教育課程に基づいた指導をしています」となんの疑いもなく話し、その後も点字を指導するそぶりがありません。私は、7月に入ってから、幼稚部と小学部重複障害学級の点字を使用すべき子どもたち一人一人に対して、一人に2時間程度をかけて、子どもたちの手を取って、ボディイメージや数概念、触覚による図形概念の形成状況などを調べてみました。すると点字をすぐにでも指導できる子、着席しての対面指導が可能になれば点字指導ができる子、手指の動きを統制できれば点字指導が可能な子などと判断できる子どもたちが多くいました。当然、この結果を担任に説明し、保護者にも伝えて、二学期からは、教育課程を点字指導と点字の触読を可能にする教科指導を行うよう抜本的に変更しました。

○「管理職の目」が専門性を育てる

.....

○「保護者の目」、「地域の目」が専門性を磨く

.....

この盲児の点字触読指導の開始時期は、もし視覚に障害のない幼児であれば、通常、3歳以前から親や祖父母は絵本などを買い与えるなどして、また兄弟等との遊びにより、文字を読んだり書いたりする機会を持つことが出来る。そのような環境の中で、具体的には、赤や青などの色の名前が分かるようになる。大きい・小さいが分かるようになる。○△□の形が分かって、面白がって顔なども描くようになる。また、多くの言葉とその意味が分かるようになってくる時期である。

しかし、盲児は、意図的にそのような機会を持つよう、また触って分かるような仕組みを考えてやらなければ、盲児が聞いて分かるような仕組みを考えてやらなければ、視覚に障害のない幼児と同様にはならないが、視覚に障害のない幼児と同様に、その発達段階が、保護者の茶碗と自分の茶碗を大きさで区別することができる。また前後の印をつけたシャツやパンツを一人で着脱できる。さらに手に乗せたお5個くらいの菓子を数えることができるなどの段階であれば、十分に点字触読指導を行うことが出来ると言える。

(2) 盲児の点字触読の基盤を整える

盲児が3歳程度までの発達段階に至っていない場合でも、点字触読を行うための基盤を整える触覚を通した指導をすることが重要である。

特に、視覚で事物や事象を観察できない盲児は、とにかく多くの物に手や肌などで触り、匂いを嗅ぎ、抱きしめることなど、体全体を用いて物に触ることが将来の豊かな概念を得させるためにも重要である。このため、乳幼児の時から、手を目の代わりとするような触覚指導がことのほか求められる。

また、触って分かるもののほかに、動作を言葉で表すような、例えば「鳥が飛んでいる」というような動詞については、できるだけ保護者や指導者自身が体を用いて動作化したり、盲児の体を動かし、動作化させたり、かつ触ることが出来る実物や模型で説明したりする必要がある。

これらのことと並行して、意図的に「手を目の代わりにする」ために必要な手の動きや、概念を広げるための指導を、積み木遊びや各種教材・教具、日常生活に使う用具等を用いて、次の視点で「弁別学習」を行い、偏りのない概念が持てるよう工夫する必要がある。

○図形弁別	○重量弁別	○大小弁別	○長短弁別	○角度弁別
○形態弁別	○図形弁別	○粗滑弁別	○硬軟弁別	○乾湿弁別
○太細弁別	○厚薄弁別	○温度弁別など		

この「弁別学習」に際しては、同じ物体か異なる物体化の同異や、形ブロックを木の型などにはめる型はめ、布地等の手触りで素地を分けること、重さ比べなどの重量の分類、大から小へ、また長から短へなどの順序並べなどを遊びとして興味・関心が持続するよう工夫することが重要である。

また、日常生活での基本的な生活習慣としての衣服の着脱に際するボタンはめや、チャックの上げ下げなどでの手指動作の使用等を向上させるとともに、意図的に、撫でる、つまむ、はさむ、つかむ、握る、ねじる、たどるなどの手指の基本的な動作や操作能力を高める教材・教具を活用することが大事である。この際、家庭との連携を図って、これらの手指の動作が円滑に行うことが出来よう、家庭で用いる食器洗いや掃除などのお手伝いを通して、体の動作と手指の動きがより一層向上するよう取り計らうことが重要である。

### (3) 点字触読の基礎的指導

点字触読指導の全ての子どもたちに共通したマニュアルはない。それは、盲幼児個々の実態が様々なうえ、保護者等の支援体制も多様であるからである。

しかし、本稿では、鈴木式点字触読指導法を説明するため、各指導の内容等を分かりやすく例示する。

☆1 「メ」見つけ遊び：事前に点字のアとメの区別を指導する。この指導では、盲幼児を盲幼児の背後から抱き抱え、盲幼児の左人差し指を、指導者の左親指と人差し指で柔らかく持って、アとメの点字に滑らかに、左から右に触れさせることが重要であり、ここではまだ、盲幼児と指導者は向かい合ったポジションでの位置をとらないことが、盲幼児の点字触読に向かう意欲付のためにも大事な指導の要点と言える。

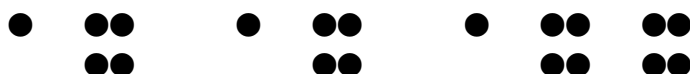
1行にアとメを書き、「アアアアメアアメアアア」と声を出して読む。「メ」を見つけたらほめる。



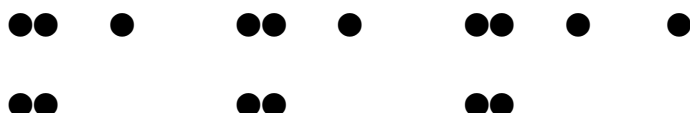
☆2 「アメ、アメ」遊び：飴を食べながら、「アメ、アメ、アメ、メア」と声を出して読む。



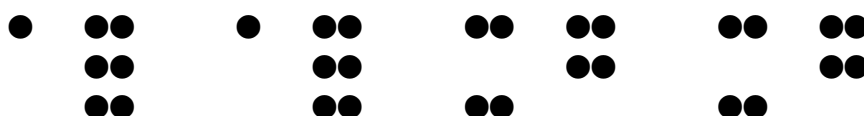
☆3 「アレレ」遊び：「アレ、アレからアレレ」を見つける。



☆4 「ファファ」遊び：「ファファからファア」を見つける



☆5 「アメ、アメ、フレ、フレ」歌遊び：アメアメフレフレと点字を読んで、何度も歌う。



#### (4) 点字触読指導の原則

点字触読指導においては、次の3点を大原則として押さえて指導することが重要である。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 認知しやすい点字から指導する。「易から難への原則」</li><li>2. くりかえし、くりかえし継続的に指導をする。「ドリルの原則」</li><li>3. 個々人の力に合った指導をする。「個別化の原則」</li></ol> |
|--|

##### ○「易から難への原則」

「ア メ レ フ ウ イ ニ ク」のように、筆者が区分した5段階の点字群を参考にするなどして、触弁別し易い点字から、点字指導を導入する。また、触読可能になった点字を、常に、ベースにして、新たな点字を、1字毎、混ぜて単語を作ったり、短文を作ったりして、楽しく指導する工夫が大事である。

##### ○「ドリルの原則」

点字触読指導は、通学している場合は両親との指導連携、寄宿舎に在舎している場合は寄宿舎指導員との指導連携を図って、毎日の学校での指導と同じ時間数を、自宅や寄宿舎で繰り返し指導できるよう工夫することが大事である。

そのため、学習する点字シートを繰り返し、学習することが出来るように、テープレコーダー等の音声を記録する媒体を活用して、繰り返し、繰り返し、同じ点字シートを学習できるよう教材を工夫することが重要である。

##### ○「個別化の原則」

一人の指導者が複数の盲児等を指導しても、けして、複数の盲児等は同じペースで点字を学ぶわけではないことから、一人一人の盲児等の触読の特性とともに、このペースを大事にして、愛情深く、かつ粘り強く個々に応じた点字を教材にして指導することが重要である。

このため、一人一人の盲児等が点字を確実に触読することが出来たかどうかを把握する必要があることから、「無意味つづり」に点字を配列したチェック表を用いて、点字触読の状況を評価する。「無意味つづり」の文字は、次のような文字配列としたチェック表としている。

無意味つづりチェックテスト	年 月 日
は、お、る、つ、て、や、さ、ろ、ま、ぬ、そ、し、え、の、い、あ、ひ、り、れ、こ、み、と、た、ら、ふ、め、ほ、わ、な、ん、よ、け、む、ゆ、す、に、を、ね、せ、う、も、き、へ、く、か、ち、だ、び、が、じ、ず、べ、ぐ、ぜ、ど、ば、ご、ざ、ぶ、ぎ、づ、で、ぼ、げ、ぞ、ば、び、ぺ、ぶ、きや、にゆ、ちよ、	
所見	

#### (5) 難易度1段階の指導例

③の学習が頭調に進み、「アは、一つの点」「メは、縦長の四角(1~6点全部)」「レは、小さな四角」「フは、間が開いている2本の短い横棒(レール状)」「ウは、短い横棒」「イは、短い縦棒」「ニは、長い縦棒」「クは、上が短い横棒で下に離れた点」と、この8字を諳んじることが出来る盲児等は、実際の点字と上記の点字イメージとのマッチングにより20分~30分以内に触読可能となる。

この8字全てのイメージを諳んじることが多少難しい盲児等は、点字学習シートに1列毎にこの点字を打ち、盲

あ、あ、あ	・・・
め、め、め	・・・
れ、れ、れ	・・・
ふ、ふ、ふ	・・・
う、う、う	・・・
い、い、い	・・・

に、に、に・・・  
く、く、く・・・

児等の背後に指導者が回って、盲児等の左手人差し指を軽くやわらかく操作して、点一つは「あ」「あ」・・・と、イメージを与えながら繰り返し指導する。

さらに難しい対象児（者）には、一字一音を暗記するまでドリルするが、この場合の提示点字数は2～3字とする。この指導後、弁別的に指導した2～3字を提示して、例えば「あ」「め」「れ」の3字であれば

- ・一点だけのどれ。それはなんという字。
- ・大きなかたまりはどれ。それはなんという字。
- ・小さなかたまりはどれ。それはなんという字。

と聞き学習成果を確かめる。

この点字触読の学習進度が遅い盲児等は、ことさら本人とその保護者の点字触読が可能になったとの喜びは大きく、以後の点字触読を進める強い意欲付となる。

このため、どんなに遅い歩みであっても、個々の盲児等の実態に応じた点字触読の実態である限りは、点字を触読出来たことをほめ、共に喜びあうことが最も指導者として求められることである。

この「難易度1」の点字触読のチェックとして

- ・ランダムに配置した8字の提示
- ・8字を使って作った単語・文章による例  
 単語： あめ、あう、あに、あく、めいれい、ふく、にく、くに、いく、いう、うめ  
 文章： あめに あう。 あに めいに あう。 うめ にく あめ かう。  
 めいれいに うめく あにに あう。等
- ・先述した無意味つづりテストによる指導評価を行う。

なお、点字触読と点字打字（点字を書くことを点字を「打つ」という。）は、できれば同時並行させて指導することが望ましい。

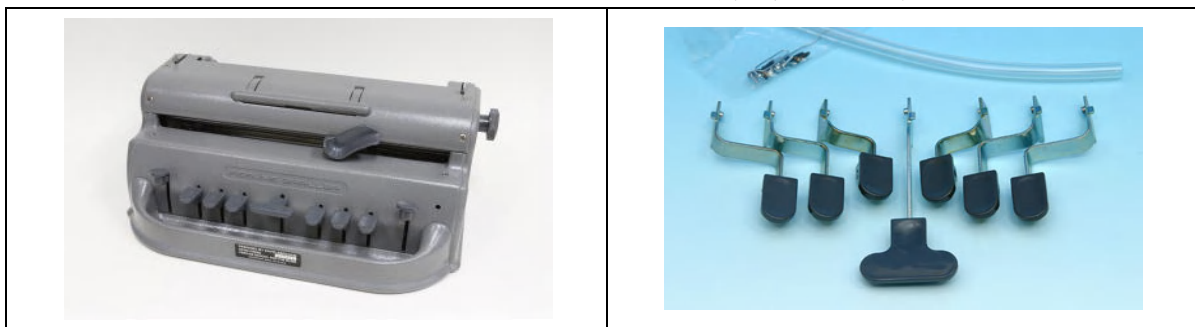
しかし、この場合は、点字器として、点字板を用いることは絶対にしてはいけないことである。点字板によって打つ点字は、鏡映文字を打つことになり、盲児等は混乱するので、特段の留意が求められる。

点字を打字する場合、必ず、表打ちのパーキンスブレーラー等を使用すべきである。しかし、この場合も各キー間が離れていることや指の力のない盲幼児ではキーの入力のために、一本の指だけの力では押し続けられない難点があるので、「片手打ちキーセット」を取り付けるなどの工夫が重要となる。

最近発売された小型パーキンスブレーラーは、幼児でも楽に扱うことができるようなキー配置に工夫されている。

パーキンスブレーラー

片手打ちキーセット

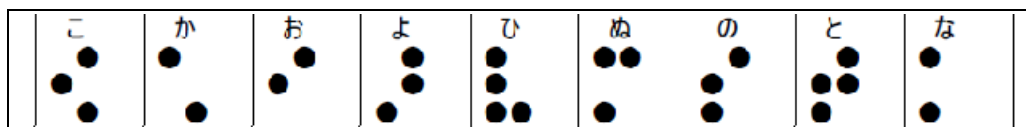


小型パーキンスブレーラー



## (6) 難易度2段階の指導例

難易度2段階の点字は、次の点字群である。



この上記の点字群の点字2～3字を、既に習得している難易度1の点字と合わせて提出する。

例えば、「こ」「か」「お」の3字を指導する場合

- ・イメージとパターンを学習する点字シートで学習する。

「こは、とんがっている」「かは、斜めの離れた点」「おは、右上がりの斜めの線」



- ・難易度1段階の点字と「こ」「か」「お」の3字を組み合わせた単語、無意味の2字つづり・短文シートで学習する。

単語 : こめ、これ、こい、あか、かめ、かれい、かい、かに、かく、かう、あお、おれ、おに、おい、おく、におい、うお、おれい、かこい、等

短文 : あめお かう。

- ※ この段階では、触読字の指導と考え助詞の「を」を使わず、「お」を使う。

いか かに かれい こめお かう。

あかおに あおおにに あう。

あに めい おいに あう.....

無意味の2字つづり : あか、めか、れか、ふか、うか、いか、にか、くか、あお、めお.....

上記のような点字学習シートと同じ内容の録音テープ教材を用意して、何回もドリルさせた後、その指導時間の定着度を、指導した11文字のランダムな提示、任意の単語、短文によりチェックする。また保護者や寄宿舍指導員の支援を得て、学校で学習した点字シートと対にした録音テープ教材によるドリルを繰り返し行ってもらおう。

- ・「こ」「か」「お」が読めていれば、次の「よ」「ひ」「ぬ」・・・の2字～3字を、次回の指導内容として11字に合わせた点字学習シートと録音テープ教材を用意する。
- ・1字あるいは2字が定着していないと判断した場合は、その字と次の「よ」「ひ」「ぬ」・・・の1字～2字だけを中心とした点字学習シートと、テープを用意して定着化をはかる。
- ・「こ」「か」「お」の全てが読めない場合は、難易度1段階の8文字点字を再度チェックして、その8文字点字が定着していれば、「こ」だけを難易度1段階の8文字点字に合わせた点字学習シートとテープにより「こ」の定着をはかる。

上記の指導を繰り返し、「な」まで終了したなら、17文字点字をランダムに配置したシート、17文字点字を使用した単語・短文シート、無意味つづりテストで触読状態を評価する。

## (7) 難易度3段階、4段階、5段階の指導例

難易度1、2を比較的簡単に終了した盲児も、この段階から学習する進度が遅くなる傾向がある。その原因と考えられるのは、

- ・触読点字数の増加
- ・点字パターンが回転した点字が多くなること

点字パーターは、難易度2段階までも、

(くー、ぬー)(よ、の)(か、な) とあったが、

難易度3段階では、さらに、

(こく、た)(と、し)(あ、わ)(ひし、ね)(よの、さ) と増えてくる。

しかし、たとえ点字触読学習の新規点字の学習スピードが遅くなったとしても、あきらめることなく、身についた点字を繰り返し、繰り返し、家庭や寄宿舎との連携により、学習することが大事である。また、同時に教室はもとより、学校内での点字情報環境を整備するとともに、家庭内でも盲児が触ることが出来る所、例えばピアノに「びあの」と書いた点字表記を張るなど、点字への興味・関心が高まるような工夫をしてもらうことも大切である。

### (8) 濁音、半濁音、促音、長音、拗音、拗半濁音、特殊音、数字の指導

濁音等の指導については、清音 46 文字の点字触読指導が終了した段階で取り扱うことが、点字触読指導の順序性からも大事な視点である。濁音及び半濁音は、清音の前に特定の符号を前置するし、促音は特定の符号を後置することが点字文法の規則になっているので、清音と清音の点字と点字の間隔が身に付いた段階で指導する。また、長音等については、例えば長音については、「ア」列の長音は「ア」を添えること、「イ」列の長音は「イ」を添えること、「エ」列の長音は「イ」を添えること、「エ」列の和語は「エ」を添えること、「ウ」列の長音と「オ」列の長音は長音符を用いることとした点字文法があるので、それぞれの点字と言葉の構音との対比なども含めて、点字で打った単語と実物との対比、点字打った短文と意味理解などを取り扱う授業との関連を図って、また家庭との連携を図って指導することが重要となる。

例えば、「むぎ書房 につぼんご1」には、多くの言葉の事例が載っているので、これらを点字化して教材とするのも一考と言える。この教材化した点字シートは、必ず、録音テープ教材と対にすることにより、寄宿舎や家庭での学習で繰り返し学習することが可能になる。

### (9) 点字触読速度の向上指導

上記⑧の指導でも文章を用いた指導を繰り返すが、この段階まで指導を進めた盲幼児は、その触読速度（小学校低学年程度以下の読み物）がおおよそ毎分 20～30 字以内の場合が多い。このため、この点字触読速度を上げるための指導目標を、一応、毎分 40 字～60 字とする。

その指導内容・方法は、次のとおりである。

#### 1) 点字学習に対する時間的耐久性が低い盲児に対する指導

普通の点字紙に、童話（200 字～300 字程度）や文章を点字用紙 1 枚（長ければ 2 枚に分けて）に打ち、それを学習シートとし、その内容と対応する録音テープ教材を聞きながら学習する。

指導者の録音速度は、盲児が触読出来る毎分速度の 1.5 倍を目途として吹き込む。

- ・ 1 日 1 枚の学習シートで、繰り返しドリルする（大体 2 回～3 回）。指導者が録音テープ教材を作成する場合の注意点としては、⑧の指導に用いる録音テープ教材も同様であるが、マスから次のマス空けまでを、ひと続きに読み、1 点字 1 点字毎の逐語読みは、けっしてしないことである。
- ・ 盲児の点字触読をしている時の姿勢と触読動作、特に左手の人差し指と右手の人差し指の動かし方には特に留意して、正しい両手読みが可能になるよう、また生漕にわたって正しい美しい姿勢で、速く点字を触読出来るようになるよう注意する。
- ・ 次に、指導者の録音テープ教材で、楽に触読出来るようになった繰り返しの指導の後、盲児自らが録音テープに触読している文章を吹き込む。その時、指導者はその読み始めから読み終わりまでの時間を測定し、その学習シートの字数（濁音等は 2 マスを使用しても 1 字とする。）で計算した毎分速度を、毎日、継続的に記録して、グラフ化しておくとともに、この毎分速度を常に盲児に知らせ、触読速度向上への励みとする。



- ・実際の触読速度を測るときは、初見の点字シートを用いて、毎分の触読速度を計算する。この時、点字シート作成の基になった冊子名などは毎分速度とともに記録しておく。

## 2) 点字学習の時間的耐久性がある盲児に対する指導

B4 大点字紙を特製して、上記1)と同様の指導を行う。上記の時間的耐久性が低い盲児も学習への時間的な耐久性が高まるにつれ、この大きさの点字紙に切り換える。学習教材としては、字数500～600字程度の小学校1年生程度の内容の物語が最適である。

点字の触読指導においては、どの段階もそうであるが、指導者は、機械的な指導にのみ専念せず、盲児に対して愛情を注ぎ込み、常に励まし、さらに高い触読速度等を得ることができるよう、指導することが大事である。

## 3) 書きの指導

点字の書きについては前述したが、パーキンスプレーヤーのような表打ち点字器のみを使用することが絶対の条件である。しかし点字板のよさもある。それは携帯性（いつでも、どこでも）、入手のしやすさ（価格面、量）の2点である。

点字触読指導においては、表打ち器のキー配置と点字の形態との関係や、打った文字が即時にフィードバックすることが出来る点などから、パーキンスプレーヤー等の表打ち器を使用すべきである。

このパーキンスプレーヤー等の表打ち器は、視覚障害者の「日常生活用具給付制度」の対象品目になっているので、市町村の福祉補助の対象になっている。

点字の書き指導の方法であるが、触読指導の初期から、パーキンスプレーヤー等の表打ち器を盲児が入手していれば触読指導の一環として導入すべきである。その内容・方法は次のとおりである。

- ・点字学習シートを指導者の録音テープ教材でドリルした後、盲児自らがテープに吹き込む。（ベーステープの作成）
- ・ベーステープを聞きながら、学習シートを自己チェックする。
- ・ベーステープを聞きながら、表打ち器で、点字をタイピングする。
- ・ベーステープを聞きながら、盲児自らがタイピングした点字シートを自己点検する。

この4つの内容を1サイクルとして繰り返す。

## 4) 点字のタイピング指導

点字の表打ち器でのタイピング指導においては、特に初期の点字触読指導時においては、表打ち器のキーと、打ち出される点を対応した指導（このキーは1の点、2の点等）は、絶対に指導しない。この点との対応を指導すると、点字触読に際しても点字の点の構成を読み取ろうとして、指先で点を確かめる「ひっかき読み」になる恐れがある。したがって、「あ」はこのキー。「め」はこことこのキーなど、指だけのキーパターンとして、特にその指導の初期は留意する。

また、表打ち器のキー配置と各指の分担は、明確に、かつ厳しく指導する。もし、誤った指の分担を指が憶えて、固定してしまうと、後々、生涯にわたって、点字タイピングに際する時間のロスが出たり誤字タイピングの原因となったりして、修正が困難となる。もし指の分担が不安定な場合は、2点（左の中指）と4点（右の中指）のキー上に、フェルトを貼るなどの印をつけるか、U字型の中指を固定するための補助具を工夫するなどすべきである。

なお、この点字のタイピングによる点字打ちの速度は、遅くとも上記⑦の段階までに導入する。この導入の初期は、タイピング速度は触読速度よりも遅いが、その打字速度は触読速度にすぐに追いつく。

## 引用・参考文献

- (1) 鈴木重男 昭和48年「実践的養護訓練論」（全日本盲学校教育研究会「盲教育」第36号）
- (2) 鈴木重男 昭和49年「点字は600分でマスターできる」（北海道視覚障害教育研究会「道視研」No.19）
- (3) 鈴木重男 昭和56年「個別的点字触読指導法」（全日本盲学校教育研究会「盲教育」第52号）
- (4) 鈴木重男 昭和57年「北海道高等盲学校の養護・訓練」（北海道視覚障害教育研究会「道視研」第37号）
- (5) 鈴木重男 昭和61年「入門期の点字触読指導の実践記録～誰でも、どこでも出来る点字触読指導の技術を求めて～」（北海道視覚障害教育研究会「北海道視覚障害教育研究大会 平成61年度 研究紀要」）
- (6) 瀬尾政雄 1966年「入門期における点字読字能力の発達について」（日本盲心理研究会編「盲心理研究」第14巻 pp.1-18 1966年）
- (7) 鈴木重男 2004年「専門性を育て磨き上げる」文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編 「特別支援教育 No.15」